

## 龍門寺遺跡

朝夕は底冷えのする季節となり、発掘調査も4ヶ月になろうとしています。

調査は、市道付近の南側から先に進めてきましたが、いよいよ遺跡北端の一段高い平場（標高30m）の調査にはいります。この調査区は、遺物包含層がV字状に堆積しており、深いところでは5~6m以上掘り下げることが予想されます。遺物は、前号まで紹介したとおり特徴ある弥生土器が多数出土すると思われます。

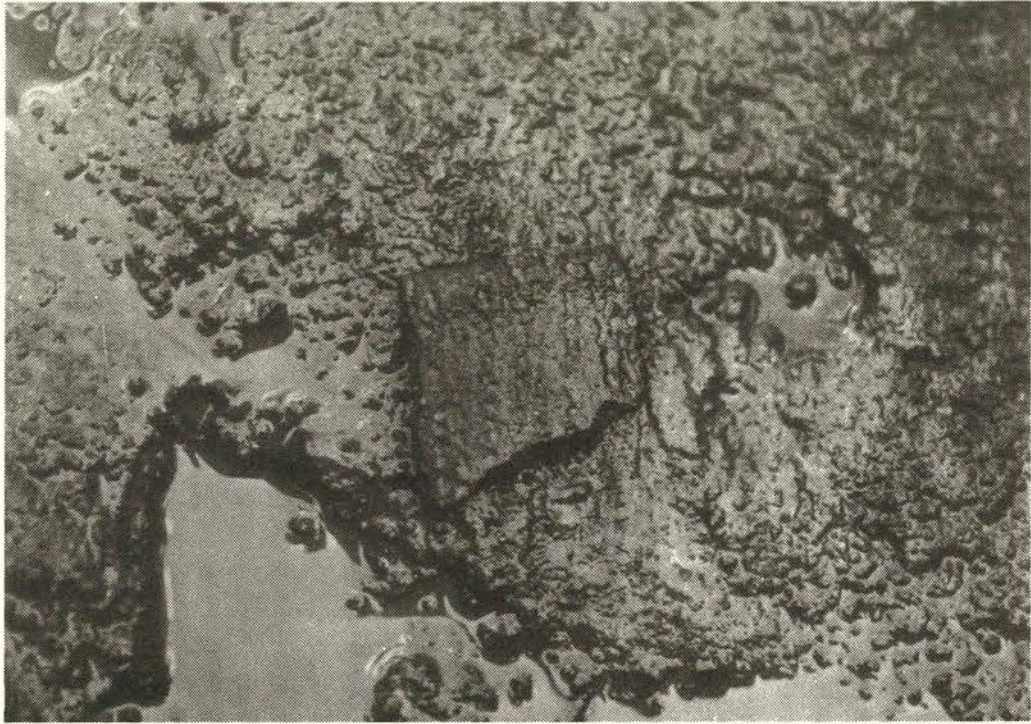
現在まで検出された遺構は、古墳1基、円形周溝状遺構1基、中~近世以降の掘立柱柱穴群、土坑群、井戸跡など数多くあります。なかでも柱穴群は、市道近く（標高20m）にまとまりがあり、その数は倍加するものと考えられます。

土器は、今のところ完全なかたちで出土するものはほとんどありませんが、その数は1万点を越えています。また、4ページに掲載してある石幣は、いわき市内で初めてのものとみじょうに価値の高いものです。



龍門寺遺跡 南からみた1号溝跡





龍門寺遺跡における縄文早期土器の出土状況

### 縄文早期土器

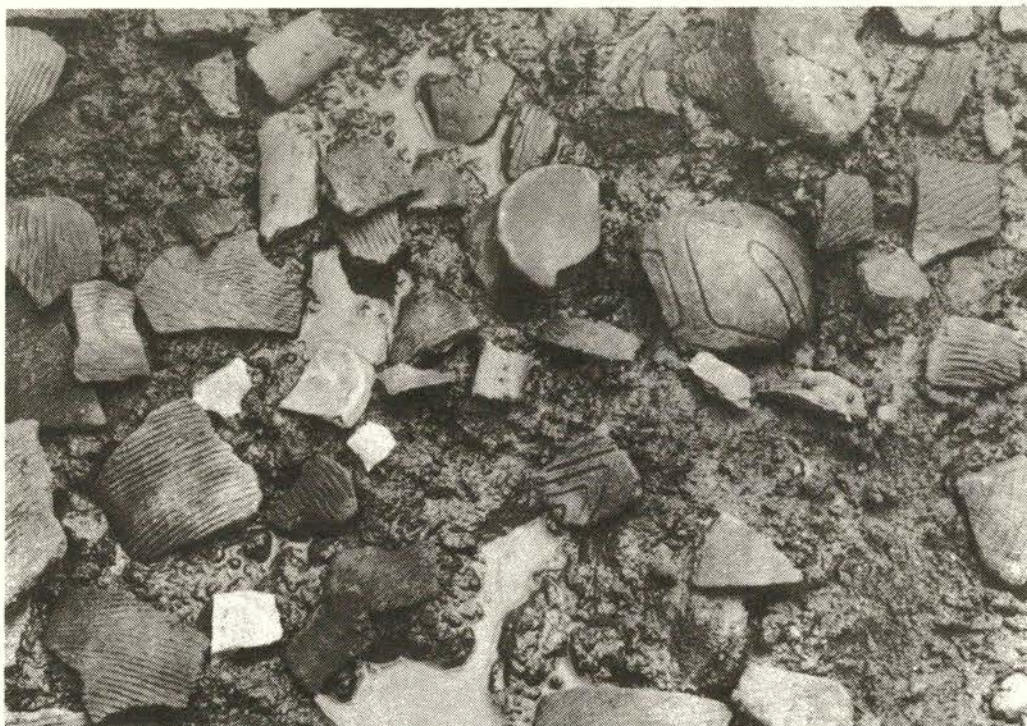
遺跡の東側の畑で約1.6m下の層(粘りの強い茶褐色土)から出土した縄文時代では最も古いと言われている早期の「撚糸文土器」です。この「撚糸文」という文様は、「縄文」が撚った紐を直接土器の表面に押しつけて転がして現われるのに対して、撚った紐をさらに棒などの軸に巻きつけて転がすことにより現われた文様をいいます。また、この土器といっしょに器面に全く文様のない「無文土器」が出土しています。

龍門寺遺跡では、これらの古い土器の上の層から同じ早期でもより新しい丸線文(ちんせんもん)土器が出土しています。つまり自然に堆積する場合の原則通りに、深くなるにつれて古い土器が出土することになります。

数多くある市内の遺跡で、縄文時代早期の撚糸文土器や無文土器を出土するものは少ない。一昨年発掘調査を実施したいわき市三和町沢渡小学校裏の『竹え内遺跡』では、これらの古い土器が少量に見えたとして、関東、東北にその名が知られるようになりました。

阿武隈山脈に囲まれた「竹え内遺跡」と太平洋岸に注ぐ滑津川上流の草木川を眼下にもつ「龍門寺遺跡」の土器を比較することによって、「いわき」に土器が出現した時代背景をより詳しく知ることができると思います。





龍門寺遺跡における弥生中期土器の出土状況

### 弥生中期土器

龍門寺遺跡中央西端の調査区(K-2)では、表土下1.5mのところから、上図のように土器や石器などが重なりあつて多数出土しています。これらの土器は、磨消縄文の施されたものとそれに伴う一連のグループと考えられるものです。

前回まで紹介したとおりその文様は、いままでいわき地方においてはみられなかつたものが多く、龍門寺遺跡独特の特徴をもっています。その器種(かたち)はさまざまで、頸部が短く肩の張る壺や口縁部が直立する甕、内わんする甕、外反する甕、さらに加えて鉢、椀、蓋などバウエティーに富んでいます。そしてそれらが一つのセットをなすものと考えられます。その鉢、椀、蓋などは、磨消縄文特有の文様で飾られ、そのモチーフはほぼ似かよっています。

これらの土器といふ、しょに出土している石鏃や石斧もまた同時期のものと考えられます。

このように、ほぼ同時期のものがまとまって出土しているものの、いまだ完全なかたちで出土した土器はみつかっていません。また、それらの土器類が埋められた痕跡もないことから考えれば、斜面上方より一括して捨てられたものと思われる。今後、その土器を含む層の調査が進めば、さらにその数はぼう大な量になることが予想されます。





### 龍門寺遺跡出土の石帯

石帯とは、大化の改新(645年)以後の律令時代に役人が使った帯の一種です。革の帯に四角形の巡方と半円形の丸鞆を数個づつ付けたものです。石でつくられたものを石帯、金属でつくられたものを銚帯と言います。銚帯と石帯では使われた年代がちがいます。また、役人の位によって金製や銀製といった材質の差があります。

龍門寺遺跡の1号溝跡からは、石製の丸鞆が1個出土しました。大きさは、横が4.0cm、縦が2.65cm、厚さが0.9cmで、裏側には二個づつ組のくぐり穴が3組あけられています。



銚帯復原模式図

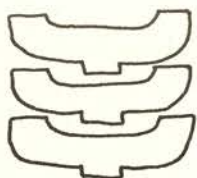
### 読者の声

#### 龍門寺遺跡とのめぐりあい

#### 龍門寺遺跡発掘調査 一作業員

夏の強い太陽の日ざしを避けて木陰を追って休憩した日々も束の間、寺の参道に銀杏の落葉が黄色の絨織を敷きつめる季節となり、私達作業員も4ヶ月目の発掘に入りました。愛谷遺跡の数多い出土品に比べ遺物の数の少ないのに最初はちょっと落胆しました。しかし、勉強会での調査員の説明で、この出土品は龍門寺式と名づけられるほどの価値のあるものと判り感激もあらたになつた次第です。調査はどの班でも、汲み上げてもすぐ溜まってしまふ地下水の汲み上げと泥だらけの作業の連続でした。ある朝刊に掲載されていた(くまぼろし紀行)稲荷山鉄剣の周辺を一番先に読んで、もし発掘の仕事をしていなか、たら私の目にこの活字は入らなかつたことだろうと考える毎日です。

遺跡とのめぐりあい、また人と人とのめぐりあい、大事にして行きたいと思ひます。



### 《龍門寺遺跡現地説明会のご案内》

開催日 昭和57年12月5日(日)

時間 午前10時~午後0時

編集

(電話)0246-24-2803

(財)いわき市教育文化事業団

龍門寺遺跡調査係

とじておきましよう